

学術

フランスにとっての シャルル・ドゴール

「国父」の事蹟を客観的に等身大で描いた詳細な評伝

小窪千早

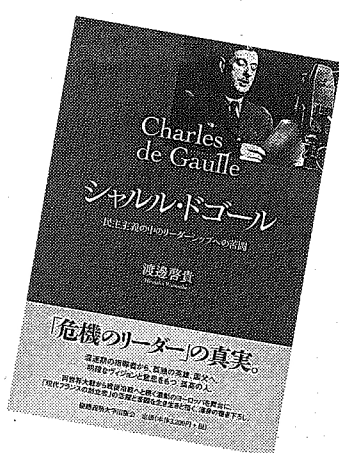
渡邊啓貴 著

▶ シャルル・ドゴール

民主主義の中のリーダーシップへの苦闘

7・20刊 四六判392頁 本体3200円

慶應義塾大学出版会



フランスにとってシャルル・ドゴールとはどのような存在なのであるか。本書は、ドゴールの生涯をその生い立ちから、軍人時代、レジスタンスと解放の時代、「砂漠の横断」と呼ばれる下野の時代、そして再び政権に就いて第五共和制の初代大統領としてフランスを統治した時代、と全生涯にわたってその事蹟を詳しく綴っている。特に本書は大統領となつてからの彼の外交政策について緻密な分析がなされており、また優しい家庭生活としてのドゴールの私生活も温かく描き出されている。日本人によって書かれたドゴールの評伝で、ここまで詳細なものは初めてであろう。

著者が「おわりに」の章で述べているように、本書の試みは、ドゴールという人物の全体像を歴史的な文脈の中で解明しようということにある。著者曰く、日本ではドゴールという人物は「一面的に語られる場合が多い。その一面的なイメージとは、一九六八年五月の危機の際に批判されたような権威主義的で頑固な指導者としてのイメージであり、あるいは、対米自立の外交を傲岸かつ鮮やかに展開した独立不羈の政治家としてのイメージである。いずれも間違いではないが、彼の全体の中の一面に過ぎない。ドゴールという存在はすべて多面的なものである。

自身をその理想に重ね、祖国フランスへの無私の忠誠を貫いた軍人であり政治家であった。彼自身は間違いなく民主主義者であったが（もっとも彼の考える民主主義とは、民主的に選ばれた偉大な指導者による統治であつて、議会政治というものを彼は信用していなかった）、その高踏的なリーダーシップのあり方は、時として傲慢なものに映った。

ドゴールのリーダーシップが最も端的に現れるのは彼の外交政策である。ドゴールはフランスが国際政治の中で大國であり続けることに強いこだわりを抱いており、冷戦という東西二極構造の中で、フランスの自立を強く希求した。ドゴールの外交はフランス独自の核戦力保有やフランスのNATO軍事機構からの脱退といった政策に見られるように、対米自立外交として知られている。しかしながら、ドゴールの「自立外交」は西側陣営の一員としてのフランスの立場を根底から変えるものではなかった。著者は「演出された自立外交を「演出された自立」であつたと分析

ちと衝突したし、ソ連や東欧諸國に接近し、欧州の東西分断を克服しようとする試みも、プーハの春をソ連が鎮圧したことにより挫折を迎えた。本書ではこうした外交の経緯も詳しく論じられている。

ドゴールの「演出された自立」の外交は、なぜ政治的な立場を超えて多くの人に高く評価されたのであろうか。ドゴールの外交には、国際政治の力関係を冷静に見つめながら、状況の中で少しでもフランスの行動の自由を拡げ、フランスの存在感を高めようとする現実的なたたかきと、大きなヴィジョンを描いて意的に現状を変革しようとする理想主義とが、渾然と共存している。そして現実と理想との間で、欧州の東西分断を克服して自由なヨーロッパを構築し冷戦構造に代えて多極的な国際秩序を構築するとうように、フランスの「自立外交」を普遍性のあるレトリックで語る独自の世界観と構想力がドゴールにはあった。そこにドゴールの多面的な複

雑さと魅力があるように思われる。

ドゴールの存在は、今なお多くのフランス国民に支持されており、その後のフランスの政治にも多大な影響を残している。党派の左右を問わず、

フランス第五共和制の歴代の敗や挫折を繰り返して、理想と現実との間でフランスの偉大さを求めて苦闘したドゴールの事蹟を、客観的に等身大で描いた評伝である。民主主義「国父」なのである。本書はドゴールを礼賛した偉人伝ではなく、現実と理想の間での国家

の外交のあり方を考えるうえで、本書が詳細に綴るドゴールの生涯は、日本人にとつても大いに示唆を与えてくれるであろう。

(静岡県立大学講師・国際政治学)